

氏名	大矢 薫
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	院博甲第 23 号
授与機関	東京成徳大学
学位授与年月日	2021 年 3 月 18 日
学位授与条件	学位規則第 5 条第 1 項
学位論文題目	臨床実習をやり抜くためのレディネスを高める心理教育プログラムの開発
論文審査委員	主査 吉田 富二雄 東京成徳大学大学院 教授 副査 菊池 春樹 東京成徳大学大学院 准教授 一谷 幸男 東京成徳大学大学院 教授 田中 速 東京成徳大学大学院 教授

## 1. 論文概要：（1）目的、（2）方法、（3）結果及び考察

### （1）目的

日本の医療技術者養成校において、a) 臨床実習を最後までやり抜く力とはどのようなものであるのかを検討し、b) 臨床実習を最後までやり抜くための心理教育プログラムを開発し、c) その心理教育プログラムを、臨床実習をやり抜くためのレディネスを高めるべく、1年次の学生に対して実施し、心理教育プログラムの有効性を確認することを目的とした。

### （2）方法

本研究は4つの研究から構成される。研究1では、文献研究（論文を20本抽出）に加え、医療技術者養成校で指導している教員19名、実習先で実習生を指導している実習指導者155名を対象とする質問紙調査を行い、医療技術者養成校において臨床実習の中断や単位不認定となった学生の特徴を検討した。研究2では、臨床実習をやり抜いた大学生69名、実習先で実習生を指導している実習指導者155名を対象とする質問紙調査を行い、臨床実習をやり抜くための要因を検討した。

次に研究3では、臨床実習をやり抜いた大学生69名、医療技術者養成校で指導している教員19名、実習先で実習生を指導している実習指導者155名を対象とする質問紙調査を行い、日本人大学生が臨床実習をやり抜くために実習前に実施しておくことと良い心理教育のニーズとどのようなプロセス、つまり、実施形態や方法が適切かを検討した。研究4では、研究1～3の結果をもとに臨床実習をやり抜くためのレディネスを高める心理教育プログラムを作成した後、大学1年生を介入群41名、統制群25名に分け、本プログラムを実施し、効果検証を行った。

### （3）結果及び考察

研究1と研究2の結果から、「対人関係」、「知識・技術」、「情意領域」、「自己表現」、「ストレス対処」、「モチベーション（姿勢）」、「相談行動」、「周囲の人々の存在」などが日本人大学生の臨床実習をやり抜く力につながると考えられた。これらのことから日本人大学生の臨床実習をやり抜く力を「臨床実習に必要な知識・技術、実習に対する意欲的な姿勢、他者信頼、良好な対人関係構築、ストレスを感じたり困ったりした

ときの相談行動から構成される力」と本研究では操作的に定義した。

研究3の結果を踏まえ、研究4では、アサーション・トレーニング、認知的再構成法、ソーシャルスキル・トレーニング、援助要請行動、漸進的筋弛緩法からなる『臨床実習をやり抜くためのレディネスを高める心理教育プログラム』を作成し、大学1年生を介入群と統制群に分けて実施して効果検証を行った。成人用ソーシャルスキル自己評定尺度（相川・藤田，2005）の「主張性」因子得点において、介入群の介入前に比べて介入後に有意に上昇していることと、介入群と統制群との間の交互作用に有意な傾向が認められ、心理教育プログラムの有効性が示唆された。

---

## 2. 評 価：

学位論文として、十分、意義のある研究であった。「臨床実習を最後までやり抜く」をテーマに、丁寧に文献にあたり、学生、養成校教員、実習先指導者への調査を経て、「臨床実習を最後までやり抜く」力と、その対になる、実習中断となる学生の特徴や要因を見出した。「臨床実習を最後までやり抜く」力を身に着けることを念頭に、「心理教育プログラム」の作成に取りかかり、そのプログラムのニーズ調査、プロセス調査も丁寧に行っている。COVID-19の影響で、元々、実習に行く直前の大学3年生に行うはずだった「心理教育プログラム」が実施できなくなるトラブルが生じた。しかし、学内での本格的な実習指導が導入される1年生に対して「やり抜くレディネスを高める心理教育プログラム」に修正し、準実験デザイン（混合計画）による、有効性の検証を行う工夫を施した。部分的、限定的であるが、「臨床実習を最後までやり抜く」力への貢献が認められた。心理教育プログラムを含む「臨床実習を最後までやり抜く」研究の最終評価は、研究に参加した学生が実習をやり抜き、卒業を迎えるまで明らかにはならない。引き続き、縦断的な調査を行っていくことが課題となる。

---

## 3. 最終試験結果：

2021年2月6日、公開において、論文提出者より報告を受け、質疑応答が行われた。その結果、最終試験に合格と判断された。

---

## 4. 結 論：

論文審査と最終試験結果の評価に基づいて、本論文は博士の学位に値すると判断された。

2021年2月12日